

記憶障害者の日常生活におけるメモリーノート利用の実態 — 利用場面および利用内容の違いに着目して —

内田 愛¹⁾, 郷右近 歩²⁾, 菊池 紀彦³⁾, 平野 幹雄^{4) 6)}, 野口 和人^{5) 6)}, 熊井 正之⁷⁾

¹⁾ 東北大学大学院教育情報学教育部

²⁾ 三重大学教育学部

³⁾ 独立行政法人国立病院機構西多賀病院

⁴⁾ 東北文化学園大学医療福祉学部

⁵⁾ 宮城教育大学教育学部

⁶⁾ 宮城教育大学特別支援教育総合研究センター

⁷⁾ 東北大学大学院教育情報学研究部

要旨：記憶の外的補助具を利用することは、記憶障害を抱える人々にとって有効であることが指摘されてきた。本研究では、補助具の一つであるメモリーノートに着目し、記憶障害を有する一事例を対象として、メモリーノートが利用される場面や記入される内容など実生活場面での利用実態について分析を行った。その結果、自宅や作業所では自発的にメモリーノートを利用するものの、それ以外の場面では自発的な利用はほとんど見られないことが明らかになった。しかしながら、本人にとって印象的な出来事が生じた場面や必然性のある場面、メモリーノートの利用を想起させる手がかりがある場面では主体的にメモリーノートが利用されることも明らかになった。このことから、記憶障害者が主体的に補助具を利用するためには、継続的な利用の促進と同時に、本人にとって意味のある動機や必然性をもつことが必要であり、補助具は記憶障害者にとって単に不足する情報を補うために用いられるものではないことが示唆された。

キーワード：記憶障害 外的補助 メモリーノート 日常生活

I. 問題と目的

記憶障害を有する人々に対しては、記憶の外的補助具の利用がしばしば勧められる。記憶障害者は、情報の記録、想起といった自らの記憶機能を用いて活動することが困難となるため、それらの機能を外的に補うもの、すなわち補助具が必要とされる。これまで補助具として、メモリーノート、手帳、リスト、アラーム、音声出力装置、PDA、ICレコーダー、携帯電話などがあげられ、その有効性が検討されてきた (Inglis, Szymkowiak, Gregor, Newell, Hine, Wilson, Evans, & Shah, 2004; Kapur, Glisky, & Wilson, 2004; Oriani, Moniz-Cook, Binetti, Zanieri, Frisoni, Geroldi, De Vreese, & Zanetti, 2003; Wade & Troy, 2001)。特に近年では電子機器の利点を生かした補助具の利用が着目されている。ただし、電子機器を用いた補助具については有効性が高いと評価される一方で利用頻度はそれほど高くはないとい

う報告もある (Evans, Wilson, Needham, and Brentnall, 2003)。記憶障害者が補助具を利用する際には、使い方を学習できない、系統的に用いることができない、操作法に戸惑う (Wilson, 1999) といった問題が生じるためであろう。記憶障害者の日常生活で用いられる補助具について調査した Evans, et. al. (2003) によれば、最も利用されていた補助具の上位3つは、カレンダー/ウォールチャート、メモリーノート、リストであり、それぞれ対象者の72%、63%、62%に利用されていた。中でも、メモリーノートは比較的扱いやすくしかも多種に渡る情報を保持することができる。記憶の補助具に関する研究が始まった当初より現在に至るまで、メモリーノートの利用に関しては多くの研究がなされてきた (刎田, 2001; McKerracher, Powell, & Oyebode, 2005; Sohlberg, & Mateer, 1989a; Sohlberg, & Mateer, 1989b 高橋・後藤・田谷, 1996)。

メモリーノートに関するこれまでの研究では、ノートをどのように構造化し、どのように用いるか、利用を定着させるにはどうすればいいのかといったことが主な課題とされてきた(後藤, 2006; Sohlberg, & Mateer, 1989)。記憶障害者のメモリーノート利用においては、その障害ゆえに「メモを取ろうとしない、取ったメモを見ない、メモをいくつも取ってしまい肝心の記載事項を見つけられずに混乱する、適切かつ簡潔なメモが取れないため、結局何をメモしたのかわからなくなる」(丹・高橋, 2003)といった問題が生じる。従って、前述のような課題のもと特にリハビリテーションの分野においては、記憶障害者が利用可能となる有効なメモリーノートの提案、加えてそれが確実に利用されるよう適切な訓練が試みられてきた。ただし訓練等により補助具の利用が可能になったとしても、補助具が記憶障害を補償する上で実際に有効であるかについては十分な検討が必要となる。江藤(1997)が報告した事例では、リハビリテーションによって買い物リストや、電話や調理のためのメモなど複数の補助具を利用することができるようになったものの、日常生活ではそれらを利用する機会がほとんどなかった。このことは、補助具を用いた記憶障害の補償を検討する際には、リハビリテーション場面だけではなく、その後の日常生活場面にも着目し補助具の利用状況を確認する必要があることを示している。

これまで、日常生活において記憶障害者の補助具利用に注目した研究には、大きく2つのタイプがある。一つは、リハビリテーションでの訓練によって利用できるようになった補助具が日常生活でも継続して利用されるかどうかを確認するものである(青野・刎田・吉光, 2000; 水品・坂本・本多・綿森, 2002; 鈴木, 1995)。もう一つは、リハビリテーションで用いていた補助具に限らず、記憶障害者が日常生活において実際にどのような補助具を利用しているかを調査するものである(Evans, Wilson, Needham, & Brentnall, 2003; Wilson & Watson, 1996)。これらの研究では、本人あるいは関係者に対してアンケートやインタビューを行い、主として補助具の利用の有無や利用頻度といった側面から利用実態を明らかにしてきた。しかしながら、それらの補助具がどのような場面で何を目的として用いられるのかといった点に着目した研究はほとんどない。なお、前者の

研究では、適切な場面で補助具が利用されているかなど補助具の利用場面が着目されてはいるものの、予め補助具を利用すべき場面や内容が明確に決められており、それに基づいてリハビリテーションの効果を確認するに留まっている。日常生活の中で補助具が実際に用いられていくためには、記憶障害者本人が自らの生活にどのように補助具を組み込み利用しようとするかが重要な要素となろう。すなわち、量的な側面からだけではなく、補助具が記憶障害者の日常生活においてどのように利用され、またそれがどのような意味をもつのかといった視点からも検討を行う必要があると考えられる。

以上のことから、本稿では、日常生活において多くの記憶障害者が利用しており、かつ従来から補助具として研究がなされてきたメモリーノートに着目し、記憶障害者の日常生活における補助具の利用実態、すなわち利用場面や利用内容について明らかにすることを目的とする。その上で、記憶障害者の日常生活における補助具利用について考察する。

II. 方法

1. 対象者

対象者は1986年生まれ、右利きの女性、M.H.。20歳。1998年(当時12歳)12月頃から身体の不調が目立ち始め、その後、病院にて脳腫瘍との診断を受けた。なお、腫瘍は松果体周辺部に見られた。1999年2月に腫瘍の除去手術が行われた。手術以後、M.H.は特に記憶や想起にかかわる場面において困難を示すようになった。1999年10月から原籍校である中学校の特殊学級へと通い始め、養護学校高等部を経て、現在は心身障害者通所授護施設(以下、作業所)に通っている。

2003年に実施されたWAIS-Rでは、言語性IQが79、動作性IQが52であり、全IQは65であった。なお、動作性IQの低さは脳腫瘍除去手術以後に生じた運動能力の低下によるものである。WMS-Rでは、言語性記憶が57、視覚性記憶、一般記憶が各々50未満、注意/集中度が63、遅延再生は50未満であった。2004年に実施された日本版リバーミード行動記憶検査では標準プロフィール点が1点であり重度の障害が認められた。

検査結果に示されるように、M.H.の有する記憶障害は重篤なものである。日常生活場面では記憶障

害により様々な問題が生じていた。例えば、M.H.は数分前のことでさえ思い出せないことがしばしば見られた。それにより、同じ発言や同じ行動を何度も繰り返すことや、他者から行うよう指示されたことを遂行できずに途中で途方に暮れてしまうといった場面が見られた。また、目的地や道順等に関する情報を把握することに困難を抱えており、外出先では待ち合わせ場所に向かうことができない、トイレに行った後戻って来ることができない、帰宅する際に利用するバス停を見つけることができない等のことが生じていた。

2. 観察および記録

2002年4月より、週に1、2回の割合でM.H.の自宅に伺い、彼女と日常生活での活動を共にしながら観察を行った。2002年5月から9月にかけては月に一度、M.H.が診察に通う病院にも同行し、診察の様子や身体機能のリハビリテーションの様子についても併せて観察を行った。2002年10月から2003年3月にかけては、週に2回M.H.の通う養護学校にて登校時から下校時までの活動の様子についても併せて観察を行った。2005年4月から2007年現在までは、週に1回M.H.の通う作業所にて登所時から退所時までの活動の様子についても併せて観察を行った。なお、1回のかかわり時間はおよそ8時間である。記録は、かかわり終了後筆記による記録を主としたが、可能な場合はビデオカメラやICレコーダーによる動画・音声の記録も行った。

3. 分析

筆記記録、動画・音声記録を分析資料とした。資料の中からM.H.がメモリーノートを利用していた状況を取り上げ、ノートが利用されていた場面、利用内容について整理を行った。さらにそれぞれの場面について、ノート利用が自発的に始まったものかあるいは他者から促されることにより始まったものかに着目し分析を行った。

Ⅲ. 結果

1. 日常生活におけるノートの利用実態

M.H.の日常生活においてノートが利用されていた場面を整理した結果、ノートが利用されていた場面としては、自宅、学校、作業所、外出先の4つが

見られた。ノートの利用内容としては、出来事の記録、スケジュール管理、他者との約束、備忘録の4種類が見られた。以下では、それぞれの場面ごとにM.H.のノート利用について示す。

1) 自宅でのノート利用について

自宅でM.H.はB5サイズのノートを利用している。一日につき一ページであり、その日の日付と気温、天気、一日の行動を記入する欄が設けられている。行動を記入する欄は、6時から20時まで一時間ごとに区切られており、それぞれに見出しと本文が記載される。ノートは台所のテーブルの上に置かれ、常にその日のページが開かれた状態となっている。

ノートに記入される内容は、出来事の記録と他者との約束であった。M.H.は出来事の記録として、その時点までに自らが行った行動とそれに対する感想を頻繁に書き留めていた。記入はM.H.が一つの活動を終えるごとに行われていた。例えば、起床、朝食、帰宅といった活動や、エレクトーンの練習、勉強や読書などといった活動が記入されていた。ただし、記入される文章はほぼ毎日同じようなものであった。ごく稀にはあったものの、他者との約束場面でノートが利用されることもあった。例えば、M.H.と筆者らの一人が休日の予定を決めていた場面では、待ち合わせの時間や場所をノートに書き留めることが見られた。

2) 学校でのノート利用について

学校では、A7サイズの携帯用のノートが利用されていた。自宅で利用するノートと同様に、記入ページは一日につき一ページとなっており、ページには日付を記入する欄のみ設けられている。ページにはその日一日の教科や移動教室先が書かれた小さな時間割が貼られている。M.H.は毎朝そのノートをカバンに入れて出掛け、学校に着いた後、机の中や服のポケットにノートを入れ替えていた。ノートを利用することが必要となる場面では、机やポケットから出し記入を行っていた。

ノートに記入される内容は、出来事の記録、スケジュール管理、他者との約束であった。出来事の記録としてM.H.は、授業の内容や行事などの活動、およびそれに対する感想を記入していた。記入は授業の合間や昼休み時間に行われていた。スケジュール

ル管理としては、一日の予定となる時間割が貼られており、それを参照することによって次の授業や移動場所が確認されることがあった。なお時間割については、当初M.H.自身が朝の会の前後に黒板を見ながらノートに書き写していたが、次第にプリントアウトされた時間割をノートに貼るようになった。稀に他者との約束場面でノートが利用されることが見られた。例えば委員会の集会について何時にどこに集まるようにと伝えられた場面では、そのことをノートに書き留めることが見られた。

3) 作業所でのノート利用について

卒業後に通っている作業所では、在学時に利用していたものと同様のサイズ、様式のノートが利用されている。ノートに記入された内容は、帰宅後自宅用のノートに書き写されている。

ノートに記入される内容は、出来事の記録であった。作業所にはM.H.専用のホワイトボードが置かれており、M.H.の行うべき作業の内容が記入されている。なお、ボードはM.H.の席の近くに配置されている。M.H.はそのボードを見て内容を確認し、出来事の記録を行っていた。

4) 外出先でのノート利用について

休日等、出掛ける際には自宅で用いられているB5サイズのノートが利用される。M.H.は外出する時にノートと筆記用具をカバンに入れ持ち歩いていた。なお、自らがノートをカバンに入れて持っていることは常に把握できており、ノートの存在を忘れることはない。

ノートに記入される内容は、出来事の記録、備忘録であった。出来事の記録としては、外出先で行った行為、M.H.が出掛けた場所、昼食の時間などが場合によっては感想と共にノートに記入された。また、ごく稀に備忘録としてノートが利用される場面もあった。例えば、M.H.は自宅で小遣い帳をつけているが、昼食で利用した金額を忘れないようノートに書き留めることが見られた。

2. M.H.の自発的なノート利用について

ノートの利用場面としては、M.H.が自発的に利用を開始するものと、他者が利用を促すことによって開始されるものとがあった。ノート利用各場面で

Table 1 ノートが利用される場面および自発的な利用の有無

場面	内容	自発	他発
自宅	出来事の記録	●	○
	他者との約束	○	○
学校	出来事の記録	○	●
	スケジュール管理 他者との約束	-	● -
作業所	出来事の記録	●	●
外出先	出来事の記録	-	●
	備忘録	○	○

※ ●は頻繁に見られるもの、○は稀に見られるもの、-は無いかを意味する。

のM.H.の自発的な利用について Table 1 に示した。また、M.H.が自発的にノートを利用していた場面についての代表的なエピソードを Table 2 に示した。

自宅での出来事の記録場面では、M.H.が自発的にノートを利用することが大半であった。M.H.は他者から促されなくても、活動が終了した後や何か新しい活動を行う前には必ずノートのある場所に向かい記入を行っていた。ただし稀に、記入を忘れていることや他者との会話に夢中になりノート利用がなされないことがあり、他者から利用を促されることが見られた。また自宅での約束場面はほとんど見られなかったが、ごく稀に自宅でM.H.と他者が休日の待ち合わせ場所や時間について相談をする時に、M.H.が自発的にノートに必要な情報を記入することがあった。また、M.H.が約束場面でノートを利用しようとしなかった場合には、他者の方から利用を促すこともあった。

学校での出来事の記録場面では、他者から「ノート、書いて」と促されてノートを利用することが大半であり、M.H.が自発的に出来事を記入しようとするのはほとんど見られなかった。ただし、自分が生徒会の選挙に立候補して皆の前で演説を行った後や、校内のマラソン大会でグループ2位になり表彰されたとき、施設見学に行く際に学年の代表で挨拶をして欲しいと教師から頼まれたときなど、M.H.にとって特別な出来事が起こっていた場面では、稀にはあるものの自発的にノートを利用しようとする場面が見られた。また、教師から過去の出来事について尋ねられた時や自らの所属クラブについて尋ねられた時に、自発的にノートを参照することが見られた。スケジュール管理場面については、ノート

に時間割が記載されているものの、M.H.から自発的に利用することはほとんど見られなかった。次の授業やスケジュールが分からない場面では、M.H.は教師から声を掛けられるまで待つといった様子が見られた。また、次の予定が分からなくなった場面で教師がいなかった場合には、ノートを持してい

ても参照は行われず、途方に暮れたようにそのまま廊下に立ちつくしていることも見られた。時間割が利用される大半の場面は、教師の方からM.H.に声を掛け、移動教室や次の授業についてM.H.が答えられない時に参照を促すというものであった。他者との約束場面は、学校ではほとんど見られなかった。

Table 2 自発的にノートが利用されていた場面の具体例

場面	内容	具体例
自宅	出来事の記録	episode 1 作業所から帰宅した後、M.H.は台所にあるノートの所へと行き、16時の欄に『21分に帰宅しました着替えて明日の準備します』と記入した。 なお、ノートには他にも『4分にエレクトーンの練習終わりました楽しく弾きこなすことができよかったです』、『6分に着がえ顔洗い終え朝食食べ本読み計算歯磨きします』などといった文章が記入されている。
	他者との約束	episode 2 作業所から帰宅し、M.H.がノートを書いている間、M.H.の母親とA.U.は次の日曜日の予定について話していた。次の日曜日は大学の研究室が開催するイベントにM.H.とA.U.とで参加することになっていた。普段はA.U.がM.H.の自宅まで迎えに行っていたが、今回は駅前で待ち合わせをしようという話になった。すると、その話を側で聞いていたM.H.は、自発的にノートを利用し始めた。ノートの日曜日のページには、『10時駅前バスプール待ち合わせUさんと』という文章が書き込まれた。
学校	出来事の記録	episode 3 マラソン大会の表彰式が行われた。M.H.はグループの中で女子の部2位に入っていた。M.H.は前に呼ばれ、生徒全員の前で教師から賞状とメダルを渡された。M.H.は自分が賞状をもらった後も、うれしそうな表情で他の生徒の順位発表を聞いていた。また、表彰式が終わった後、M.H.は担任の教師の姿を見つけて側に行き、もらった賞状を教師に広げて見せていた。教室に戻り自分の席に着くとM.H.はすぐに机の中からノートを取り出して『マラソン大会で入賞できてメダルもらえてよかった。』と記入していた。なお、その日の帰りの会でM.H.は「今日はマラソン大会があつて疲れたけれど、けっこう入賞できてよかったです。」と発表した。担任の教師が「スラスラと出てきたね、Mさん。」とM.H.に話しかけると、「けっこう、良かった一つ思ったから。」とM.H.は答えていた。
	他者との約束	episode 4 生徒会役員であるKさんがM.H.のいる教室に連絡を伝えに来た。Kさんは教室の入り口で「生徒会の1年生は…」と話し始めたが、教師に「Mちゃんのところに行って話して」と促され、教室の中に入って来た。「Mちゃん」と言いながら側に来たKさんに、M.H.は「おはよう」と挨拶をした。Kさんが「今日、給食の後にプレイルームで生徒会の集まりがあるので来てください。」と伝えるとM.H.は「はい」と返事をした。Kさんが自分の教室へ戻った後、M.H.は自分から、服のポケットに入っているノートを取り出し、「書いておこう」と口にした。M.H.は『給食の後、上の階のプレイルームで生徒会があるので集まる』とノートに記入した。
作業所	出来事の記録	episode 5 午前中の作業が終わり、M.H.は自分の席の近くに立ち、手持ちぶさたな様子で周囲を見渡していた。M.H.は自分の後ろの方に掛けられていたホワイトボードの方に顔を向け、自分専用のホワイトボードがそこにあることに気付いた様子だった。M.H.は服のポケットに手を入れたがノートは入っていなかったようで、次にロッカーの所へと行きカバンの中からノートを出して席に戻った。M.H.はホワイトボードを見ながら自分が午前中に行った作業を書き写した。
外出先	備忘録	episode 6 M.H.とA.U.と一緒に昼食を食べに行った。昼食を食べた後、A.U.に促されて、M.H.はノートに、食事をした時間を記入していた。M.H.は昼食の時間や内容について記入を行った後、しばらく考え込んだ様子でノートを見ていたが、「いくら食べたか書いておかない」と言って自発的にノートに昼食代を書き留めた。

※ A.U.とは筆者らのうちの1名のことを指す

教師もM.H.の障害を理解しており、必要な場面で直接M.H.に声を掛ける、重要なことは他の教師に直接伝えたり連絡帳を介して母親に伝えるといったことを行うため、約束事に関してノートの利用を促すことはなかった。M.H.自身も他者から言われたことに関してノートを利用することはほとんどなかったが、隣のクラスの生徒が委員会の集合場所について直接M.H.に伝えに来た場面では、自発的にノートを利用し時間と集合場所を記入する場面が見られた。

作業所での出来事の記録場面では、M.H.が自発的にノートを利用する場面も、他者から促されて利用する場面もどちらも見られた。作業所の職員は、昼休みやM.H.の手が空いた時に「ノートに書いた？」など声を掛けていた。M.H.はノートを開き、その日の出来事がまだ記入されていない場合には、記入を行っていた。また、職員から声を掛けられない場合でも、M.H.は自分専用のホワイトボードを見て自発的にノートに出来事を記入する場面が見られた。外出先での出来事の記録場面では、他者から促されてノートを利用することがほとんどであった。M.H.は自らが所持しているカバンにノートが入っていることは認識できているものの、自発的に利用しようとすることはほとんどなかった。備忘録については、ほとんど利用されないものの、稀にM.H.の昼食代を書き留める時などに利用される。一緒に行動していた他者が「忘れちゃうかもしれないから書いておいた方がいいんじゃない？」と勧めることもあれば、M.H.が自発的に「ここに書いておこう」といって記入することもあった。

IV. 考察

本稿では、記憶障害を有するM.H.のメモリーノート利用について分析を行った。得られた結果は以下のようにまとめられる。第一に、自宅での利用、学校での利用など、場面によってノートの利用のされ方は異なっていた。第二に、ノートの利用を習慣化することによって、自発的な利用はある程度定着していた。第三に、ごく稀にはあるものの、本人にとって印象的な出来事があった場合や必然性のある場合は主体的にノートが利用されていた。以下では、これらのことを踏まえて若干の考察を行うこととする。

従来、記憶障害者が補助具を利用する際に着目されてきたのは、補助具を利用する行為の定着ということであった。記憶障害者はその障害ゆえに補助具であるメモリーノートを十分に利用できるとは限らない。そのためメモリーノート利用については体系的な訓練プログラムを行うことによってまず利用を定着させることが重要な課題とされてきた。例えば、記憶のリハビリテーションでは30分ごと（本田・鹿島, 1992）や1時間ごと（鈴木, 1995）など、その時までに行った活動や、その時行っている活動について記録することが促される。ボイスタイマーや電子アラームを用いてメモリーノートの利用を促すことで頻繁に利用する習慣を確立させる試みもある（後藤, 1997）。M.H.の場合、特に母親が中心となって長期にわたりメモリーノートの利用を促してきた。現在、特に自宅では利用がほぼ定着し、他者からの促しが無い状態でもM.H.は自発的にメモリーノートを利用することができるようになっている。また常にメモリーノートを自分が利用する補助具として意識することができていた。このことから、これまでの研究で提言されてきたように、本人が扱えるような補助具を提供し、継続的に利用を促していくことが、記憶障害者の補助具利用の定着には重要であったといえよう。

ただし、M.H.はある程度自発的にメモリーノートを利用できるようになっていたが、その利用はかなり限定されたものであった。出来事を記入するという同じ行為でも、自宅では行われているが学校や外出先では行われないなど、場面により違いが見られた。また、自宅で見られていた自発的な利用も、記載されている内容は毎日ほぼ同じであり、M.H.がその日に会った他者や変則的な活動等に関する記載はほとんどなかった。このことから、メモリーノートの利用は特定の場面での習慣として行われており、M.H.においてメモリーノートの利用は一見自発的に行われているものの、自らの活動に結びつけ本来必要となる目的のために積極的に使いこなすといった実際的な利用となっていない可能性が示唆される。なお、記憶障害者の補助具利用について小松（2002）は、ある場面で獲得された補助具利用が他の場面に般化していくことは実際にはきわめて難しいと指摘し、訓練の対象を特定の知識や技能のみに焦点化する領域固有学習のほうが記憶障害者にとっ

ては役立つと述べている。確かに前述したように、メモリーノートの利用が習慣化されている自宅以外の場面ではほとんど利用が見られないなど、M.H.においても般化の問題は生じていた。しかしながら一方で、稀にはあるものの、通常であればほとんどメモリーノートが利用されていない場面でも状況によっては主体的に利用されることが見られた。このことは、M.H.は習慣化により獲得した行為によってメモリーノートを利用するだけでなく、他の要素によっても影響を受けることを示唆している。

M.H.が主体的にメモリーノートを利用できていた状況に着目すると、次の3つの要素のうちいずれかが関わっていたと考えられる。一つ目はメモリーノートを用いて情報を保持しておきたいという強い動機(例えば、episode 3)、二つ目は他者を頼ることができず自分で対処しなければならないという必然性(例えば、episode 2, episode 4, episode 6)、三つ目はメモリーノートの利用を想起させるような手がかりの存在である(例えば、episode 5)。なお、リハビリテーションを受けた記憶障害患者達のフォローアップ研究を行ったWilson(1991)は、リハビリテーションでのグループセッション前、あるいは直後ではほとんど補助具を利用していなかった患者が、一年後の調査ではかなりの補助具を利用するようになったことを示した。このことに関してWilsonは、日常での問題に直面することによって補助具の必要性に気付いた可能性があると述べている。すなわち、記憶障害者の補助具利用は彼らがおかれている状況と深いかかわりを持ち、そこから生じる必然性あるいは本人がもつ動機によって利用が左右されることが考えられる。

これまでメモリーノートや多くの補助具は、リハビリテーション場面において導入・提供されてきた。ただし、そこでの補助具利用は、必ずしも記憶障害者本人のもつ動機や必然性と一致するとは限らない。なぜなら、記憶障害者は自らが記憶障害を有していることを記憶できないなど、病識が欠如していることがあり、補助具を利用する必要を感じないこともあるからである(例えば、井上, 1995)。また、リハビリテーションでは、記憶障害を補償する補助具の利用を定着させるために特定の課題を設定し、それに基づいて補助具の利用を促すこともある。安田・三須・村杉・宮崎・中村(1999)は、ある健忘症患者

者に対し補助具の適用を試みた。「また、字を思い出したい」という本人の希望もあり、補助具を用いて書字練習を促すことを行った。しかしながら、最初は補助具を確実に利用していた患者であったが、次第に馬鹿にするようになり利用しなくなるということが生じた。前述のWilson(1991)での対象者が日常生活で実際に生じる困難に直面していたのに対し、安田らでの対象者は日常生活ではあったが実際に直面する問題ではなかったためであろう。

多くの場合において補助具を導入する目的は記憶障害を補償することであるが、場合によっては単に記憶障害者にとって不足する情報を補うだけの行為になってしまう可能性がある。確かに記憶障害者は不足する情報が多いが、それら全ての情報を補うことが必要となるわけではない。本稿において、M.H.が家庭や作業所ではメモリーノートを利用する行為を習慣として獲得しているが、それ以外の場面では定期的な利用を行っていなかったことは既に述べた。このことは、以下のようにも考えられる。M.H.は、メモリーノートの利用を促す他者との関係性を維持するために利用を行っていた。すなわち、出来事や行為を記録するなど、忘却されてしまう情報を保持することがM.H.にとって重要な意味を持つのではなく、他者の要請に応えるという側面こそが重要であったということである。とすれば、メモリーノートは記憶を補うための道具ではあるが、必ずしも記憶を補うためだけに用いられるわけではないということが示唆される。本人が実際に生活し活動していく中で、真に必要とされる背景があるがために、主体的な利用に結びつくのであろう。

ただし、補助具が主体的に利用されるためには、日常生活における動機や必然性といった要素も必要であるが、まず前提条件として、補助具の利用が特定の場面であれ獲得されているということが不可欠である。M.H.の場合も、利用がある程度定着することにより、自らがメモリーノートを補助具として用いていることを認識することや、どのような情報を補助具に委ねるべきかを選択し主体的に利用することができるようになったのだと思われる。それは、これまで一度も利用したことがない事柄については、どんなに必要な場面であろうとノートが用いられていないことから明らかである。メモリーノートを利用するためのスキルが獲得されノートの存在を確

実に認識できている状態となって初めて、様々な場面でも主体的に利用できるようになってくる。その意味では、従来多くの研究が課題としてきたように、記憶障害者にとって補助具の利用が定着するということは重要である。ただし、看過してならないのはその補助具を何のために使うかという点であり、単に記憶という情報を補助具によって代替することが必要とされている訳ではないということである。

本稿では、場面や内容といった側面から日常生活場面における補助具の利用のされ方について分析を行い、動機や必然性、利用を想起させる手がかりの存在など、その場の状況によって補助具の利用に変化が生じることを明らかにした。なお、今回は主に補助具利用のきっかけについて整理したため補助具利用時の詳細については触れなかったが、上述のような条件が前提としてあるにもかかわらず補助具の利用が困難となる場合がある。例えば、きっかけがあり補助具が利用され始めても、途中で失敗することや、補助具から誤った情報を得てしまうことが見られた。今後は、補助具を利用する際に生じうる問題や、それらの問題が生じる背景要因についてもさらに検討していく必要があると思われる。

V. 文献

- 青野香代子・剱田文記・吉光清 (2000) 記憶障害を有する高次脳機能障害者へのメモリーノート訓練。職業リハビリテーション研究発表会発表論文集, 8, 126-129.
- 江藤文夫 (1997) 記憶障害のリハビリテーション。リハビリテーション医学, 34, 395-399.
- Evans, J.J., Wilson, B.A., Needham, P., & Brentnall, S. (2003) Who makes good use of memory aids? Results of a survey of people with acquired brain injury. *Journal of the International Neuropsychological Society*, 9(6), 925-935.
- 後藤祐之 (1997) 記憶障害を有する障害者に対するメモリーブック訓練について。職リハネットワーク, 37, 27-29.
- 後藤祐之 (2006) 支援のための社会資源。作業療法ジャーナル, 40(7), 689-692.
- 剱田文記 (2001) 高次脳機能障害者へのメモリーノート訓練。障害者職業総合センター職業センター実践報告, 9, 45-53.
- 本田哲三・鹿島晴雄 (1992) 記憶障害のリハビリテーション。 *Brain Science and Mental Disorders*, 3(1), 97-101.
- 本多留実・綿森淑子 (2002) 記憶のリハビリテーション。治療学, 36(8), 864-867.
- Inglis, E. A., Szymkowiak, A., Gregor, P., Newell, A. F., Hine, N., Wilson, B. A., Evans, J., & Shah, P. (2004) Usable technology? Challenges in designing a memory aid with current electronic devices. *Neuropsychological Rehabilitation*, 14(1-2), 77-87.
- 井上里美 (1995) 病変の異なる病識の乏しい記憶障害患者のリハビリテーション。江藤文夫・原寛美・坂東充秋 (編), 高次脳機能障害のリハビリテーション (pp. 193-196). 医歯薬出版.
- Kapur, N., Glisky, E. L., & Wilson, B. A. (2004) Technological memory aids for people with memory deficits. *Neuropsychological Rehabilitation*, 14(1-2), 41-60.
- McKerracher, G., Powell, T., & Oyebode, J. (2005) A single case experimental design comparing two memory notebook formats for a man with memory problems caused by traumatic brain injury. *Neuropsychological Rehabilitation*, 15(2), 115-128.
- 水品朋子 (2006) 記憶障害の方への作業療法—生活を評価する。作業療法ジャーナル, 40(7), 765-771.
- Oriani, M., Moniz-Cook, E., Binetti, G., Zanieri, G., Frisoni, G. B., Geroldi, C., De Vreese, L. P., & Zanetti, O. (2003) An electronic memory aid to support prospective memory in patients in the early stages of Alzheimer's disease: a pilot study. *Aging & Mental Health*, 7(1), 22-27.
- Sohlberg, M. M., & Mateer, C. A. (1989a) A Three-pronged Approach to Memory Rehabilitation. In *Introduction to cognitive rehabilitation: Theory and practice* (pp.136-175). New York, NY, US: Guilford Press.
- Sohlberg, M. M., & Mateer, C. A. (1989b) Training use of compensatory memory books: a three stage behavioral approach. *Journal of Clinical and Experimental Neuropsychology*, 11(6), 871-891.
- 鈴木勉 (1995) 記憶訓練において外的補助手段の使用が有効であった1例。江藤文夫・原寛美・坂東充秋 (編), 高次脳機能障害のリハビリテーション

- (pp. 197-199). 医歯薬出版.
- 高橋美保・後藤祐之・田谷勝夫 (1996) 軽度記憶障害を有する者に対するメモリーノートブック訓練. 認知リハビリテーション, 1(2), 17.
- 丹有子・高橋美貴子 (2003) メモリーノート活用の手引き. 実践編, 永井肇 (監修), 脳外傷者の社会生活を支援するリハビリテーション, 中央法規出版.
- Wade, T. K., & Troy, J. C. (2001) Mobile phones as a new memory aid: a preliminary investigation using case studies. *Brain Injury*, 15(4), 305-320.
- Wilson, B. A. (1999) Coming to terms with amnesia. In B. A. Wilson (Ed.), *Case studies in neuropsychological rehabilitation* (pp.26-42). New York: Oxford Univer. Press.
- Wilson, B. A., & Watson, P. C. (1996) A practical framework for understanding compensatory behaviour in people with organic memory impairment. *Memory*, 4(5), 465-486.
- 安田清・三須直志・村杉光司・宮崎俊行・中村哲雄 (1999) 健忘症等の支援を目的とした音声出力記憶補助機の開発. 総合リハビリテーション, 27(5), 475-478.

Actual use of a notebook by a memory-impaired person in daily life: Focusing on use situation and different contents

Ai UCHIDA¹⁾, Ayumu GOUKON²⁾, Toshihiko KIKUCHI³⁾, Mikio HIRANO^{4) 5)},
Kazuhito NOGUCHI^{5) 6)}, Masayuki KUMAI⁷⁾

¹⁾ Graduate School of Educational Informatics Education Division, Tohoku University

²⁾ Faculty of Education, Mie University

³⁾ National Nishitaga Hospital

⁴⁾ Faculty of Medical Science and Welfare, Tohoku Bunka Gakuen University

⁵⁾ Faculty of Education, Miyagi University of Education

⁶⁾ Special Support Education Research Center, Miyagi University of Education

⁷⁾ Graduate School of Educational Informatics Research Division, Tohoku University

Previous studies have pointed out the use of memory aids can prove effective for memory-impaired people. The present study analyzed an actual situation in which a memory-impaired person uses a notebook in her daily life, fills it with written reminders and uses the entries. The results revealed that the subject used the notebook on her own at home and at work but almost never anywhere else. However, she used the notebook when something impressive happened, when she felt a strong need to use the notebook, or something reminded her to use it. Thus, the finding suggested that one should continuously urge the memory-impaired person to make use of the notebook and at the same time motivation him or her to use it as a necessity for daily life. Additionally, the present study suggested that the memory aid is not used by a memory-impaired person simply to compensate for insufficient information.

Key words: memory problem, external memory aid, notebook, daily life